

機関番号：21201

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530510

研究課題名 (和文) 環境条件からみた高齢者福祉施設初任介護職員の
認知症ケアに関する研究研究課題名 (英文) Research for new nursing care workers in nursing homes of elderly
people with dementia related to the environmental condition.

研究代表者

鈴木 聖子 (SUZUKI SEIKO)

岩手県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40305272

研究成果の概要 (和文)：初任介護職員の認知症ケアにおける困難な体験を明らかにし、職場適応を促進するための手がかりを得ることを目的とした。対象者は無作為抽出した全国の特別養護老人ホームの初任介護職員 137 名である。結果、認知症高齢者が示す行為や言動の意味と園背景を理解する方法が身につけていないことによる困難、認知症高齢者ケアのイメージと現実のケアとのギャップによる困難、業務に円滑に対応できない焦りがもたらす困難の 3 点が示された。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this study was to clarify difficulties new nursing care workers experienced in the care of demented people, and to find ways to accelerate their workplace adaptation. Study subjects were 137 new care workers for special nursing homes that were randomly sampled nationwide. The kinds of difficulties observed were as follows: (1) new care staff's lack of understanding of the meanings of old dementia sufferers' words and actions as well as their backgrounds; (2) a gap between their image of care for such patients and their actual care work; and (3) care staff's inability to smoothly deal with their tasks.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：初任介護職員、職場適応、認知症ケアで体験した困難、介護福祉継続教育

1. 研究開始当初の背景

特別養護老人ホームユニット型の初任介護職員は、経験の多い職員に比べ、利用者との関わりにおけるストレスが有意に高く、さらに利用者居室の滞在時間は有意に短い。しかし、既存型では経験による差は見られず、環境条件による利用者との関わりによるストレスは経験により有意な差があることを確認した。しかし、「ケア」という観点から見

ると、その結果は周知的であり初任者と利用者の関わり過程におけるどのような状況がストレスに関与するののかというケアの本質的な課題の重要性を認識し、本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

(1) 認知症高齢者との関係を形成しながら介護を実践する過程を明らかにする。

(2)この過程における初任介護職員の変化に関係する要因について分析する。

3. 研究の方法

(1)質問紙調査 1 回目

ユニット型と既存型の特別養護老人ホーム介護職員を対象に、ストレスとソーシャルサポート（サポート源とサポートの種類）を中心とする調査を行い、ユニット型と既存型の比較を行い、環境条件の異なる初任介護職員のストレスとサポートの特性について分析した。

(2)質問紙調査 2 回目

①対象者は、認知症高齢者の介護に携わっている就職後 2 年未満の介護福祉士（ユニット型・既存型それぞれ実施）認知症状高齢者のケアで体験した困難について、自由記述を求めた。

②得られたデータを逐語録にまとめ、分析は内容分析を行った。

4. 研究成果

(研究 1)

2000 年以降、厚生労働省は、特別養護老人ホーム利用者の生活の質を高めることを目的に、新規施設の場合には全個室、ユニットケアを原則とした。それ以降ユニット型施設は、増加し続け、2008 年度には全特別養護老人ホームの 19.5% (116 施設; 厚生労働省 2008) を占め、今後も増加することが予測される。それに伴い、介護の質の向上や新しいケアシステムの導入が求められ、ユニットリーダーの育成など種々の研修事業も行われている。しかし、ユニットリーダー等の人材育成やユニット型に対応できるケアシステムの開発等課題は多い。本研究では、特別養護老人ホーム既存型とユニット型のケアスタッフの仕事継続意識と職務ストレスに対して、サポートはどのような影響を及ぼすのか、サポート源（上司・先輩・同僚を想定）およびサポートの種類（道具的サポート・情緒的サポート）からその効果を見出し、ケアスタッフ支援の視点を提案することを目的とする。研究方法の視点として、筆者のこれまでの研究結果からユニット型の介護職員は、利用者との関わりにおけるストレスが経験者に比べ、有意に高いが、既存型では経験者との違いは見られなかった。その結果を踏まえ、平成 20 年度は、初任介護職員と利用者との関係形成における要因を職場のサポートの状況から見た。

結果は、ユニット型、既存型共に情緒的サポートよりも道具的サポートが初任介護職員が遭遇するストレスに対して広範囲に有効に関わっていることが示唆された。このことは、道具的サポートである仕事のやり方や

コツ、仕事のアドバイスなどの具体的な指導という形でのサポートが有効であることを示している。また、ユニット型ではストレスに対する先輩のサポート効果は見られなかったが、既存型における先輩の道具的サポートは職場の人間関係に効果的に作用していることが示された。ユニット型では、経験者に比べて初任介護職員のストレスは高いという結果が示されているが、仕事を教えてくれる指導者としての先輩の存在は、初任介護職員のストレスを緩和するという意義が見出された。既存型のケアシステムとして、先輩は身近であり、常に仕事を共に行うことができるという特性があるが、ユニット型では初任者であっても個室での介護というケアシステムが初任介護職員のストレスに関与している可能性が見出された。本研究の結果から、ユニット型・既存型ともに上司のサポートは有効に機能しており、両者ともに情緒的サポートよりも道具的サポートの有効性が明らかになった。ユニット型では、ストレスに対する先輩のサポートの効果は見られなかったが、既存型における先輩の道具的サポートは、仕事コントロールコントロールに効果的に作用していることが示された。しかし、仕事継続意識については、ユニット型の場合、先輩のサポートの効果的な関与が示唆されたが、既存型では見られなかった。今後の課題として、今回の研究ではサポートの増加がストレス反応を低減するという因果関係を想定し進めてきた。しかし、ストレス反応の増加がサポートを減少させるという逆の因果関係の成立も否定できない。この結果は、ユニット型における初任介護職員の教育的関わりを含むサポート体制を考える上で重要な点を示唆したといえる。今後縦断的調査を行うことで実証していきたい。（報告論文：鈴木聖子：特別養護老人ホームの職務意識に対するソーシャルサポートの効果-ユニット型と既存型の比較から-、【The Influence of Social Support on Awareness of Work Among the Care Staff of Special Elderly Nursing Homes: a Comparison Between Unit-type and Conventional Institutions】岩手県立大学社会福祉学部紀要、査読有、Vol. 12 N02、2009、pp1-10.）

(研究 2)

介護福祉士教育制度の見直しに伴い、新カリキュラムによる教育が 2009 年度より実施されることになった。その背景には、後期高齢者の急激な増加に伴う認知症高齢者の介護が課題としてあげられている。それを受けて、認知症高齢者の介護に対応できる専門職として介護福祉士の養成教育が求められて

おり、「認知症の理解」として新たに 60 時間が配当されるなど、認知症の介護は介護福祉士養成教育におけるもっとも重要な科目として位置づけられることになった。また、高齢者介護研究会は「2015 年の高齢者介護；高齢者の尊厳を支えるケアの確立にむけて」の中で、認知症ケアの体系化を国の施策として明確にし、認知症高齢者ケアの確立に向けたケア内容の重要性を述べている。

本研究は、特別養護老人ホーム初任介護職員は、認知症高齢者の日常ケアにおいて、どのような困難を感じているのか、園具体的内容を明らかにし、初任介護職員に対する教育内容およびサポートについて検討した。

対象者は、WAM-NET 登録の全国指定介護老人福祉施設のうち、無作為で抽出された 300 施設の初任介護職員に質問紙調査を行った。有効回答施設は、77 施設 (25.6%)、回答者は 137 名であった。調査内容は、個人属性の他、これまで認知症高齢者のケアで最も困難に感じた内容・ケアの場面と時間帯について自由記述で回答を求めた。

倫理的配慮として、無記名で封をした個別封筒の返信による質問紙の回収とし、文書にて対象者の匿名性と任意の参加を保証した。

結果、対象者の平均年齢は 23.5 歳 (SD6.4) であり女性が 80%であった。経験は 1 年と 2 年が同程度の比率だった。ケアに困難を感じている時間帯であるが、昼、夜ともに同程度であった。データの分析は内容分析とし、分析対象は、195 記録単位であった。

その結果、初任介護職員の認知症高齢者ケアの困難内容として(利用者の関わりを起因とする困難)(介護者の経験不足や未熟さに起因する困難)(職場の勤務体制や業務内容教育システムに起因する困難)の 3 カテゴリーが形成された。さらに 3 カテゴリーは、11 の上位サブカテゴリを形成していた。以上から初任介護職員の認知症高齢者へのケアの困難は、高齢者との関わりのみではなく他の要因についても考慮が必要であることが示唆された。

本研究の対象者は、全国の指定介護老人福祉施設の初任介護職員であり、介護福祉養成施設を履修し、資格を取得した人である。介護福祉士養成施設を卒業した初任介護福祉士という対象の条件を限定することにより、初任介護職員の認知症ケアにおける困難体験の基礎的な資料を示すことができたのではないかと考える。初任介護職員にとって、もっとも困難を感じていると思われる認知症ケアについての困難体験は、3 カテゴリーに分類することができたが、今後、初任介護職員が認知症ケアにおいて、自己の直面している課題を客観的に把握することができるような測定用具の開発が求められる。また、今回の調査の対象者は、旧カリキュラムで学

んだ介護福祉士であるが、今後、新カリキュラムで学んだ介護福祉士を対象に卒業後の継続教育も視野においた調査を継続していきたいと考える。(報告論文：鈴木聖子：特別養護老人ホーム初任介護職員の認知症高齢者ケアにおける困難内容の分析【Analysis of difficulties facing new nursing care workers at special nursing homes for elderly people with dementia】日本認知症ケア学会誌、査読有、Vol.9、NO3、2010、pp543-551.)

(研究 3)

認知症ケアにおける現場の課題として、介護職員の中には、「よいケアを提供したい」とい思いをもちながらも、認知症高齢者の妄想、不穏、徘徊等の周辺症状への対応や、さまざまな業務に日々追われる中、ケアについての評価もできずにいるジレンマを抱え悩んでいる者が多く存在する。さらに、施設介護職員がBPSDにかかわることによって生じる対応の困難さ、負担感、ストレスの増加等が問題になっており、そのような負担感やストレスをかかえた介護職員は、BPSDに対して不適切な対応をとってしまうという報告も見られる。つまり、認知症高齢者への対応は、BPSDを介護職員がどのようにとらえるのかが大きく影響すると考えられ、特に若い初任介護職員は、認知症高齢者との生活体験の極端な違いなどから、話しが通じないと感じることが多く、相互理解のないままに一方向的なケアを提供し続けている状況がストレスになっていることが報告されている。

本研究の目的は、各事業所における職員への研修の取り組みが十分とはいえない中、初任介護職員の職場適応を促進するための手がかりとして、「初任介護職員の認知症高齢者ケアの困難内容」を類型化し、現場で活用可能な評価尺度開発の方向性について検討することである。また、研究は、研究2の継続的な研究として位置づけられる。

研究方法は、初任介護職員の認知症ケアの困難体験を基礎的な資料を得るために、対象者を無作為に抽出した全国の特別養護老人ホームの初任介護職員とし、介護福祉士の養成施設を履修し、資格を取得者という条件を設定した。有効回答数は137件、回答者の年齢は、21歳から23歳に集中しており平均経験年数は、従来型施設1年3ヶ月 (SD3.2) ユニット型施設1年4ヶ月 (SD3.4) であった。

調査内容は「認知症高齢者のケアで体験した困難」とし、自由記述にて回答を求めた結

果、195件の記録単位が抽出され、分析は質的因子探索型研究とし、Klaus Krippendorffの内容分析を援用した(研究2の結果に基づく)。調査項目は、研究2で得られた34の評価項目に対して、その項目の経験頻度について4段階で評定を求めた。

結果、初任介護職員が認知症ケアで体験した困難は、「利用者の言動に寄り添う」「利用者の言動を受け止める」「仕事遂行上の未熟感」「仕事への不適応感」の4因子が抽出された。本研究結果から、初任介護職員の認知症ケアにおける困難内容に関する基礎的な資料を示すことができたのではないかと考える。今後、初任介護福祉士の認知症ケア教育への活用や、自己の直面している課題を客観的に把握できるような測定用具として現場で活用可能な評価尺度開発の方向性を示すことができたのではないかと考える。今回の結果を一般化するためには対象者をさらに拡大する必要がある、有用性の高い評価尺度作成に向けて改良を進めていきたいと考える。(報告論文：鈴木聖子：特別養護老人ホーム初任介護職員の認知症ケアの困難内容の類型化に関する研究【Research on difficulties in offering dementia care by new care-workers at elderly nursing homes】投稿中)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①鈴木聖子:特別養護老人ホーム初任介護職員の認知症高齢者ケアにおける困難内容の分析、日本認知症ケア学会誌、査読有、Vol. 9、N03、2010、pp543-551.
- ②鈴木聖子:認知症の人の生活支障と生活支援、介護福祉、査読無、春季号、2010、pp55-64.
- ③鈴木聖子:介護ケアの質の評価に関する研究-介護ケアの質を構成する評価指標の開発-、介護福祉、査読無、冬季号、2010、pp25-38.
- ④鈴木聖子:特別養護老人ホームの職務意識に対するソーシャルサポートの効果-ユニット型と既存型の比較から-、岩手県立大学社会福祉学部紀要、査読有、Vol. 12、N02、2009、pp1-10.
- ⑤鈴木聖子:介護職員のライフサイクルとストレスマネジメント、介護福祉、査読無、N069、2008、pp33-48.

[学会発表] (計 3件)

- ①鈴木聖子:老人福祉制度の主要検討課題、韓国老人福祉学会、2010年5月28日、韓国(ソウル).

- ②鈴木聖子:特別養護老人ホーム新任介護職員の認知症高齢者ケアにおける困難内容、第10回日本認知症ケア学会大会、2009年10月31日、東京国際フォーラム.
- ③鈴木聖子:環境条件からみた特別養護老人ホームケアスタッフの職務意識とサポートに関する研究、第16回日本介護福祉学会大会、2008年11月2日、仙台白百合女子大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 聖子 (SUZUKI SEIKO)

岩手県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号: 40305272